新作 blomst【ブルームスト】

THREE STORIES *of* ROYAL COPENHAGEN

ロイヤル コペンハーゲン 3つの物語

第3話 「ライラックが咲く季節に」

辻 仁成

父の還暦のお祝いにカップ&ソーサーを二組セットで贈った。父は一人暮らしなので二つのカップを手にしながら苦笑した。「誰か探した方がいい、人生長いし」と僕は言った。「これから?」父は鼻で笑った。それからカップの図柄を覗き込み、「ライラックだな」と言い当てた。父が育てているライラックが庭のあちこちで咲き誇っている。この季節に実家に顔を出すと、毎年、甘く爽やかな香りに出迎えられる。

僕は父に育てられた。友達も少なく無口で頑固なこの父親はしかし僕にとって長いこと母親でもあった。授業参観にも運動会にも父が一人で来るものだから、僕は恥ずかしかった。迎えも見送りも、料理も風呂掃除も、破れたシャツを縫うのも我が家ではすべて父の仕事。「ねえ、父さん、誰かいい人いないの?」父がずっとハンドペインティングのライラックの図柄を見つめているので訊いてみた。すると父は「うちのライラックは夏が来る前に散ってしまうが、ここに描かれた花はずっと開花したままだ。一年中、この可愛らしい花を眺めながら過ごすことができる、ありがとう」と話をはぐらかした。その横顔を見つめながら、少し老けたな、と思った。僕が社会人になったのだから、その分、父が年を重ねるのも当然であった。

「父さんはなぜあんなにたくさんのライラックを育てているの?」僕が質問すると、父は小さく頷いてみせた。「ライラックの花びらは4枚だが、たまに5枚のがある。5枚のライラックを見つけたら、誰にも言わず飲み込め。そうしたら愛する人と永遠に結ばれるぞ」僕は庭を振り返った。ライラックが風で揺れて笑っていた。「で、5枚のを見つけたことがあるんだね?」ともう一度訊き返した。すると父は「まだ、ないよ」と告げるなり吹き出してしまった。結婚したい子がいることを、いつ言いだそうか悩みながら、僕も一緒に微笑んでいた。

Hitonari Tsuji
1989年『ピアニシモ』ですばる文学賞を受賞。1997年『海峡の光』で芥川賞、1999年『白仏』のフランス語翻訳版『Le Bouddha blanc』で仏フェミナ賞・外国小説賞を日本人として初めて受賞。著書に『サヨナライツカ』『石岸』『永遠者』など多数。近著に『立ち戻る力』(光文社)。ミュージシャン、映画監督、演出家など文学以外の分野でも幅広く活動。現在は拠点をパリに置き創作に取り組む。

ROYAL COPENHAGEN
PURVEYOR TO HER MAJESTY THE QUEEN OF DENMARK
https://www.royalcopenhagen.jp

写真上 左より:ブルームスト カップ&ソーサー ライラック/ラクシア 各10,000円(税抜)、ブルームスト ティーポット ソリーピオニー 30,000円(税抜)
写真下 左より:ブルームスト ボウル フレグラント カーネーション 10,000円(税抜)、ブルームスト プレート ヒヤシンス 10,000円(税抜)